

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月28日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530498

研究課題名（和文）「21世紀型の社会統合の思想的グランドデザイン」の構想～古典と現代との媒介

研究課題名（英文）Conception of “an Ideological Grand Design for the 21st Century Social Integration” : Understanding Modern Times through Classics of Sociology

研究代表者

廳 茂 (CHO SHIGERU)

神戸大学・国際文化学研究科・教授

研究者番号：10148489

研究成果の概要（和文）：

急速にグローバルに変容しつつある現代社会、とくにそこでの統合問題をどう把握するかは、今日の社会学における最大の難問の一つである。この問いに、政治学（国家）や経済学（市場）とは違った形で社会統合の様式の観点からこたえることは、19世紀以来の社会学説の中心的な課題の一つだった。本研究は今日における統合問題の理論的把握への見通しをめぐって、社会学の古典がいかなる意味でどのように有効であるのかを検討しようとしたものである。その結果、現代における古典の利用の様々に異なった方式の類別を試みるとともに、とりわけ、G. ジンメルの「規範化様式」論や「よそ者」論、T. パーソンズのプロフェッション論などの、古典と現代を媒介しうる問題関心や概念枠組みの有効性を確認することができた。

研究成果の概要（英文）：

How to grasp the problem of social integration in rapidly globalizing contemporary society is one of the greatest questions of sociology today. To answer this question from a point of view of social integration, which should be different from that of politics (state) and economics (marketplace), has been one of the principal agenda of sociological theory since the 19th century. In this project we have examined in what sense classics of sociological theory are valid today with regard to their prospects of theoretical understanding of social integration. As a result, we could categorize different formulas of how classic theories can be applied to usage today. We could also confirm the validity of their concerns and frame of concepts to understand modern times, especially with G. Simmel's theories on “formulation of the normative” as well as “strangers”, and T. Parsons' theories of profession.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会統合、社会問題、グローバル化、社会的排除、社会的包摂、よそ者、監視社会、社会コントロール

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究を開始するまでの数年間、研究代表者は社会学における〈古典〉の意義と有効性をめぐる近年さかんにくりかえされている論議の経過に関心を向けるとともに、G. ジンメル、この数十年間その先駆性が高く再評価されつつある社会理論の思想的意味の研究に集中してきた。ジンメルの思想の私なりの解釈の大筋は、かつて単著『ジンメルにおける人間の科学』(木鐸社 1995)や編著『『貨幣の哲学』という作品』(世界思想社 2006)によってひとまずまとめているが、さらに社会学の〈古典〉の意義論を深めること、そして〈古典〉と現代の社会理論とのもっとも有望な接続項の一つとされるジンメルの意義を一層明確にすることという研究課題に直面していた。

(2) そのさい、私は研究の構えを少し大きく取ることを企図した。すなわち、連携研究者の協力も得て、〈古典〉としてはジンメルをあくまで中心としつつも、E. デュルケム、M. ウェーバーならびにシカゴ学派や、T. パーソンズなどをも念頭におくことを考えた。そして、〈古典と現代との媒介〉の接点に社会統合問題をおくことを構想した。社会統合問題は、〈古典〉期の社会学説の中心問題であるが、同時にそれは、現代社会学の最重要の関心でもあるからである。

(3) 本科研と同種のテーマは、諸外国でも大きな研究プロジェクトや国際会議などにおいてとりあげられている。だが現代社会論と社会学の〈古典〉論とを絡ませるといことは、その重要性は広く認識されているとしても、きわめて難度の高い課題であり、その点では先行する業績も十分のものではけっしてない。とくに〈古典〉的な社会学説の意義と有効性、あるいはその限界をめぐっては、議論はまだ十分に整理されていないと思われる。現代社会学における社会学説史的な〈古典〉研究の意義に対する懐疑論は、多い。しかし同時に社会学説の知識と概念のストックを軽視すればするほど、今度は、現代を分析することばと語りの密度と了解の深度が薄くなるという弊害におちいってしまう。これが今日の私達が直面しているディレンマである。私達の研究は、この学説史と現代社会論の負の循環から脱出し、〈古典〉研究と現代社会論の、相互を阻害しあわない良好な関係を探るといふ、今日的要請をふまえている。ジンメルは、〈古典〉的な社会学者のなかでは、もっとも現代に適用しやすい思想的側面をもった人物であり、今日の社会学説の根本性格にかかわる第二のモダンやポス

ト・モダン論に関係づけやすいという利点をもっている。〈古典〉の中心にジンメルを配置してみることを通して、事態を再考してみる価値は、十分にあると思われた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、社会学的〈古典〉の現代的意義を検討することである。この意義論はしかし漠然と問うても生産的ではありえないので、〈古典〉と現代に共通の中心的関心である社会統合問題を媒介項として設定する。社会統合のあり方は、現代の社会理論では、経験的な現実分析の課題であると同時に、あるべき社会のグランドデザインの問題でもある。本研究は、この現代社会学の関心と、一世紀前の社会学的〈古典〉における類似の関心を交叉させてみることで、古典の有効性と無効性の度合い、ならびに有効性を語るばあいの実質的な様態を検討することを目的としている。

(2) 上記の研究目的を分節化していえば、それは大きくは次の三つの観点からなる。
①今日の社会学説史における〈古典〉論の現状と問題点の検討。
②ジンメルの社会統合論にかかわる思想の検討。
③現代社会の統合問題にかかわる諸トピックを、そこで〈古典〉的な社会学説がどの程度有効か、そしていかなる形で有効か、という問題に配慮しつつ検討すること。

3. 研究の方法

(1) 現代における社会学説史の研究状況と動向を多数の文献をもとに調査する。これは研究代表者が分担する。英、独、仏、日で発表された社会学説史にかかわる文献を調べ、そこで何が問題となり、どういう研究状況にあるかを検討する。

(2) ジンメルの社会統合論にかかわる思想の検討。このテーマも研究代表者が担当する。ジンメルは、統合論的関心が例外的に希薄な思想家であるという定型的イメージがある。その意味で私達の研究は定説に反するものである。彼の思想の出発点となった大著『道徳科学序説』(1892-93)は、社会統合、とりわけ倫理や慣習による統合のあり方に中心的関心の一つを置いたものであり、統合問題の観点からのジンメルの分析は可能である。ただジンメルは、統合問題への関心は抱いていたが、統合が可能であるとは考えていなかった。とはいえ統合の様式には強い関心を抱いていた。定説は、統合問題関心と統合可能性関心を混同してきたのである。前者の関心

は、ジンメルによって「規範化様式 (Normierungsart / Normierungsform)」論と総称されているものである。この「規範化様式」への関心は、生涯を通じて継続された。この議論をできるだけ包括的に、19世紀後半の道徳科学論的な社会論と文化論の文献の精査をもふまえて整理する。

(3) 現代社会の統合問題にかかわる諸トピックの、<古典>論をふまえての検討。この検討は、4人の連携研究者が担当する。

(1)と(2)の研究計画を基盤として、「よそ者」「内面への無関心」、「リスク」、「個人化」、「プロフェッション」、「医療」、「労働」「排除としての他者化」など、現代社会の統合問題にとりとくに重要な、しかもジンメルをはじめとする様々の古典にも十分に関連づけることのできる諸々のトピックを考察する。そのさい、ジンメルへの配慮を中心とするもののデュルケムやウェーバーから、N. エリアス、A. シュッツ、Th. パーソンズ、A. ギデンス、Z. バウマン、U. ベックにまでいたる社会学説の展開史をふまえることを原則とする。

4. 研究成果

(1) まず社会学的<古典>の今日の有効性の内実を、もちろんその限界も含めてだが、問うことが、研究の目標の一つでもあったし、成果でもある。とはいえこれは、当初想定していたよりも、はるかにむつかしい課題であることがわかってきた。社会学説史を課題として掲げた文献を、調査、渉猟しているうちに、今日の社会学説史と<古典>研究がいかに多様な方向に分離、拡散しつつあるかが、明確となってきた。多少単純化するというならば、社会学理論は今日社会理論へと拡散、変容しつつあるが、社会学説史もこれに相応して、社会理論史、社会思想史、社会哲学史と融合しつつある。こうした社会学説史の今日の状況がなぜ出来たのか、そこでなおも社会学的<古典>の現代社会学への意義を語るとすれば、どのような可能性が考えられるか、これが研究の重要な焦点となってきた。

(2) この研究は既述したように研究代表者が主に担当した。私達は、社会学説史の型の今日における動揺の根本原因を、社会学説の<古典>論を支えてきた<モダン・クラシクス>という観念の解体の傾向のうちに見出した。そのため、社会学にとりそもそもクラシクスとは何か、モダンとは何かということを究明することに精力を傾注した。結果として、今日の社会学にとり、モダンの意味がいかに多元化したか、またいかに変容したか、そしてまたそのモダンな言説の始原であるとされることでクラシクスの認定を受ける

ことの自明性がいかに危くなりつつあるかを、解明した。

この作業をうけて私達は<古典>研究と現代社会学との連携の様々の可能的な様態、そして<古典>の何がまだ有効であり、何が無効となりつつあるのかを吟味した。最終的に、次のような事態を確認した。

①長い間社会学説史という分野の中心にあった理論構成的な学説史研究は、今日徐々に成立しにくくなりつつある。

②社会学説史は、<古典>に独立学科としての社会学を成立せしめる体系的学説の与件性を必ずしも前提としない社会学史のタイプに転換しつつある。

③この社会学史は、さらに社会理論史、社会思想史、概念史、文化史などと融合しつつある。この拡散しつつある社会学史も、歴史的に厳密な資料考証にもとづいたものというよりも、思想を概説的、総覧的に物語る社会学思想論的なものになりつつある。

④こうした全般的傾向のなかで、<古典>と現代との媒介をめぐる社会学(説)史の効用論は、各思想家の学説を現代社会論に体系的に適用しようとする理論構成的なタイプのものから、特定の概念や命題、発想をツールとして任意にそのつど借用する道具箱的な利用論にシフトしつつある。それはネガティブには概説の概説的な思いつきの羅列に墮する可能性があるが、ポジティブには、創意と着想にみちた自由な古典の翻案に結実する可能性もある。古典研究を基盤とした現代社会のグランドデザイン論云々は、この後者のタイプにおいてのみその可能性をもっている。

(3) この社会学的<古典>への考察をふまえて、私達はそれと現代の社会学説との媒介の可能性を具体的な諸トピックに即して検討した。私達は議論と検討の進展のなかで研究課題を次のように特定化し、配置した。

①<古典>と現代との媒介をめぐる、前者の<古典>論をめぐる基礎として、事前の計画どおりジンメルの社会統合問題についての思想を集中的に検討した。

②ジンメルと現代のあいだに、アメリカ社会学におけるジンメル受容、ジンメルとデュルケム、ウェーバーらとの関連、そしてパーソンズの社会理論といった様々の現代への連結項となりうると思われる論点を挿入した。

③現代の社会統合論において中心的な争点をなしている、生命、労働、他者性、といった各論題をめぐる社会学<古典>に内在する知識在庫が有効か否かの度合いを検討した。人員の限界があって、この②と③は別々の形では遂行できないことが研究の進展の中で明らかになってきたので、両者を絡みあわせて一体化することとした。その結果、

次のような課題が最終的に設定された。第1：社会学におけるジンメル受容の、とりわけ現代社会学において重要な「他者」という問題関心のもとでの検討。第2：ジンメル、デュルケム、ウェーバーらの「古典」と現代のリスク社会論や監視社会論とを連関づける視点を確保できるかどうかの検討。第3：現代社会における労働をめぐる統合と分裂の問題の検討。第4：パーソンズにおける医療の「プロフェッション」をめぐる議論の検討。もちろん第3と第4の論題においてもジンメルとそれ以降の「個人化」論などをめぐる学説史的展開が踏まえられた。これらのテーマは、事前の研究計画どおり、連携研究者が分担した。この分担部分についてはセットにして、関西社会学大会（2011）において研究成果を発表することを期したが、予定通り行われた。

④この種の学説論的、思想史的な内容分析にかかわる研究は、要約的に成果報告を箇条書きにしても意味がないものであり、あくまで文章として論述と文字を積み上げないかぎり研究の進展は望めないものである。それゆえ私達は、研究成果を印刷媒体の冊子の形にすることを目指した。最終年度2月中に各自の原稿を取りまとめ、3月に印刷物として（400字×600枚）完成した。印刷媒体による研究成果報告書の構成は、以下のとおりである。

- 1章：＜古典と社会学＞－＜問題＞としての社会学説史（廳）
- 2章：近代における「規範化様式」の構図－G. ジンメルのばあい（廳）
- 3章：社会学における stranger 論の展開（徳田）
- 4章：現代の社会的コントロールの諸特徴と社会学の古典理論－リスク的社会学の構築に向けて（池田）
- 5章：現代日本の労働における排除のメカニズムについて（大久保）
- 6章：医療社会学の「古典」としてのパーソンズ（田村）

第1章の＜古典＞をめぐる方法論的検討の成果については、すでにのべてある。以下は、印刷報告書における第2章以降の研究成果の概要である。

（4）ジンメルの「規範化様式」論が取りあげられることは珍しいことである。この着目は、本研究の成果の中心をなすものである。私達は、ジンメル初期の大著『道徳科学序説』をベースにおき、そこで近代社会と「規範化様式」との関係がいかなるものと考えられているのかを解明しようとした。ジンメルのこの大著は難解であり、この作品の解読したいが難題であった。さらにその読解を受けてジンメルの「規範化様式」論が、彼の社会学的

思考や哲学的思考とどうかかわっていたのかを見通すことは、一層容易なことではなかった。しかし同時に、ジンメルの「規範化様式」論は現代のポスト・モダンな状況をも射程に組みこみうる大変に洞察力と予見力に富んだものであり、この議論の把握と整理によって、社会統合問題を軸とした＜古典と現代との媒介＞は、一定の確かな見通しをえることができるかと期待できた。

（5）ジンメルの「規範化様式」論をめぐる研究代表者が成果として確認しえた項目は、じつに多岐にわたっているが、概略下記のテーゼにまとめることができる。①ジンメルは、一方で近代社会の文化的状況をなおも＜倫理的＞とみる立場、他方でこれをまったく＜反倫理的＞性格をもったものとみる立場に対し、それを＜非倫理的＞な位相の拡大として捉える第3の視点を提示しようとした。②この視点の確保にさいして、ジンメルは社会ダーウィニズムの思想を有益な思想的触媒として援用できるものと考えた。そこからのちの社会学の展開にとって大変に重要な「社会的合目的性」の概念が導き出される。③そのさいジンメルは、「社会的合目的性」を「個人と一般」の二つの契機の抗争と関係の場とみた。「規範化様式」もしたがって、「社会的一般性」における規範の様態と個人における規範の様態の二種の視角において追求される。④近代社会における規範性の＜非倫理的＞という性格の増大は、「社会的合目的性」の一般性論の局面にかかわるものである。⑤「規範化様式」論は、ジンメルの語る複数の社会学構想、すなわち「形式社会学」、「一般社会学」、「哲学的社会学」のうち、とりわけ、「一般社会学」に中心的に内在するテーマであり、しかも経験科学的のみならず、他方において哲学的思索にも関係する議論である。この「規範化様式」論の論点の配置と作品クロノロジーの整理は、ことに手間を要する重要な課題であった。⑥近代の文化状況における「規範化様式」は、逆説的なことに、ジンメルによるとその「社会的一般性」のレヴェルでは、＜非倫理的＞な性格を増大させる。それをジンメルは「無関心性」とよぶ。文化の＜倫理的＞契機は、個人の個別的な倫理的意識の位相に凝縮される。⑦社会の＜非倫理性＞は、それまでの身分名誉の感情を基盤とした慣習的な倫理的空間を根底から揺さぶる。そこに慣習にかわって、モード、エロス、商品、社交性などが登場する。この事態を、ジンメルは、「モダンな文化」、のちに「モダニティ」と呼称する。⑧倫理性が集約的に委託されることとなる個人の人格の局面は自己を「個性的法」として倫理的に立てようとするが、モードやエロス、商品、社交性などの作用力は強力であり、この倫理

の「個人化」は、必ずしも進捗しない。むしろ逆に主体の「個人化」は、徹底した「社会的一般性」のロジックに飲み込まれがちとなる。この個人レベルでの倫理的感覚の樹立が広範に欠如するとき、文化の＜非倫理性＞というニュートラルな性格は、いつでも＜反倫理的＞な憎悪と反感の空間に傾斜しうる。⑧この個人レベルにおける倫理性の確保こそが、ジンメルを生をめぐる哲学的視角を社会という現実にも媒介しようとする「哲学的社会学」の中心テーマとなる。⑨上記のジンメルの「規範化様式」論は、近代社会とその文化を＜倫理的＞、＜反倫理的＞、＜非倫理的＞の3つの契機の非常に複雑な錯綜として大規模に描出しようとしたものであり、現代社会学理論において最大の焦点となっている「モダニティ」や「個人化」の概念がすでに中心的に持ち込まれている点において、画期的なものだった。それゆえこれは現代における規範的な社会統合問題を検討するさい、きわめて重要な基盤となるものである。

(6) 古典と現代の社会学説を接合しようとするばあい、ジンメルという思想家は、もっとも好都合の思想家である。このことについては、＜古典＞論においても、＜規範化様式論＞においても詳しく究明した。この研究成果の上に、ジンメルと現代の間を埋める思想家論、そして様々の具体的トピック論を補填する課題がさらに求められる。これは本科研の予算規模と人員を考えると、きわめて限定的な成果とならざるをえない。とはいえ、仮に今後このテーマを大規模に展開しようとしたとき何が重要な問題であり課題であるのかは、見通すことができた。

(7) ジンメルと現代のあいだの結節項の一つとして私達が着目したのは、ジンメルがユダヤ人のアウトサイダー的な立場を念頭において使った“Fremde”（よそ者、異邦人、他者）概念のアメリカ社会学とヨーロッパ社会学における継承の文脈である。ジンメルの“Fremde”論は、アメリカ社会学において、移民やエスニックグループの問題に応用される。ジンメルの“Fremde”論は、大都市のもはや共同体的ではない、また親密でもない疎遠な「他者」同士の関係やいわゆる社会的包摂と排除の論題にも適用できるものであり、これは現代のヨーロッパの研究者たちにも受けつがれている。これらの問題史的な継承をまだラフスケッチの段階にとどまるものであるが、たどることができた。

(8) 現代の社会統合論の最大の特徴の一つは、リスク社会論と監視社会論の問題であろうが、この議論を古典との関係も考慮した形で学説史的に位置づけることができるかど

うか。これも私達の課題の一つとなった。このばあい、ジンメルだけを基盤とするのでは不十分なので、デュルケムやウェーバーも補完的に視野に入れる必要がでてきた。この問題を学（説）史的につめることは大変むづかしく、とりあえず研究は、この三者とも「大集団性」という近・現代の特性的傾向とそこでの秩序維持可能性のあり方を模索的に究明しつつあったことを確認するところまでとまることとなった。

(9) 現代社会の統合問題を考えるばあい、そこには無数の重要な個別トピックがあるが、労働と福祉の二つは欠かせないエッセンシャルなテーマである。私達は、今日の社会における分断と格差の意識の根底にある労働者間の排除の意識現象を事例的に取り上げた。本研究において一貫して注目している「他者」や「無関心」の＜古典＞的概念の有効性論とのかかわりにおいてである。「個人化」や「他者性」の概念の古典的意味はジンメル論において詳しく検討した。だがその現代的意味は、多様である。ここでは正社員／非正社員との間にうまれる差別の意識、排除の意識をめぐる「他者化」という現象が注目され、それがなぜ生じるかが検討された。

(10) グローバル化とネオ・リベラリズム的政治、経済政策ならびにポスト福祉国家論の課題が、今日の統合論においてのきわめて重要な背景的テーマである。私達は、この問題を＜古典＞論をも重ねて例示的なトピックにおいて検討しようと考えた。その例示として取り上げたのは、医療とそこでの専門的「プロフェッション」のあり方の問題である。この議論の社会的端緒を開き、医療社会学の基礎を築いたパーソンズに即して社会学（説）史的に事態を考えてみようとした。パーソンズの医療論は、とりわけ初期のアメリカ医療社会学に強力な理論的基盤を与えたという点で、一定の評価を受けてきたが、のちの医療化論、専門職支配論をはじめとする主要な医療社会学の展開のなかで矮小化されて理解されてきた面がある。本研究では、とくにパーソンズ晩年期の論稿にもとづいて、医療における不確実性、メディアとしての健康、生命倫理の再構成、合議的専門職集団などの諸問題をとりあげ、リスク化と「個人化」との関連という点から、それらの現代的意義を検討した。

(11) 本研究は、すでにのべたように長編の印刷媒体による成果の冊子化までもっていったが、そのことで同時にまた何が一層の研究課題として残っているかも鮮明となった。ジンメル研究において残っている規範と個人のあり方をめぐる「哲学的社会学」の検討は、本科研期間中において発表された研究

代表者の別の論文において成果を公表しつつある。これも長編の研究となっており、現在発表継続中である。古典と現代とのあいだをうめる各個別トピックも、人員をもう少し拡大しないかぎりなかなか網羅的につめるところまでいかないし、したがって<古典と現代との媒介>をベースに現代社会のグランドデザインを描くという課題の一層の履行はもう少し先の課題となろう。これは欧米の研究成果をみても、長い時間を要するテーマである。とはいえ、この3年間でその端緒的な基盤を固めることはできたと判断している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

① 廳 茂 「G. ジンメルにおける『社会はいかにして可能か』—第3アプリオリ論の思想的意味(中)」、『国際文化学研究』(神戸大学国際文化学研究科紀要) 第36号、2011、pp. 21-58

② 廳 茂 「G. ジンメルにおける『社会はいかにして可能か』—第3アプリオリ論の思想的意味(下の1)」、『国際文化学研究』(神戸大学国際文化学研究科紀要) 第37号、2011、pp. 1-43

③ 廳 茂 「コスモポリタニズム的社会概念<G. ジンメルのばあい>」、『社会思想史研究』(日本社会思想史学会) 第34号、2010、pp. 52-68

④ 廳 茂 「G. ジンメルにおける『社会はいかにして可能か』—第3アプリオリ論の思想的意味(上)」、『国際文化学研究』(神戸大学国際文化学研究科紀要) 第35号、2010、pp. 1-32

⑤ 徳田 剛 「Z. バウマンの社会秩序観—『よそ者』と『社会的距離』の視点から」、『社会学史研究』(日本社会学史学会) 第32号、2010、pp. 59-73

⑥ 廳 茂 「『社会はいかにして可能か』—<ジンメルとディルタイ>問題」、『社会学研究』(東北社会学研究会) 第87号、2009、pp. 5-29

[学会発表] (計5件)

① 徳田 剛 「よそ者概念のタイポロジーの系譜—類型化と理論的精緻化の試み—」、第62回関西社会学会、2011年5月28日、於：甲南女子大学

② 池田 太臣 「現代の社会的コントロールの諸特徴と社会学的古典理論」、第62回関西社会学会、2011年5月28日、於：甲南女子大学

③ 大久保 元正 「大衆社会論再考—現代日

本の排除論から」、第62回関西社会学会、2011年5月28日、於：甲南女子大学

④ 田村 周一 「健康概念の系譜と展開—パーソナルの古典理論としての意義と限界」、第62回関西社会学会、2011年5月28日、於：甲南女子大学

⑤ 廳 茂 「コスモポリタニズムと社会・文化・政治—G. ジンメルと世紀転換期の社会思想を手がかりにして」、日本社会思想史学会シンポジウム、2009年10月30日、於：神戸大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

廳 茂 (CHO SHIGERU)
神戸大学・国際文化学研究科・教授
研究者番号：10148489

(2) 研究分担者 (なし)

(3) 連携研究者

池田 太臣 (IKEDA TAISHIN)
甲南女子大学・人間科学部・准教授
研究者番号：20411845

徳田 剛 (TOKUDA TAKESHI)
聖カタリナ大学・人間健康福祉学部・常勤講師
研究者番号：60346286

田村 周一 (TAMURA SHUICHI)
神戸大学・人文学研究科・学術推進研究員
研究者番号：50467643

大久保 元正 (OKUBO MOTOMASA)
神戸大学・人文学研究科・学術推進研究員
研究者番号：70611854